

おばあちゃんとの出会い

長野県 高瀬中学校 3年 薄井 大翔

(あのおばあちゃん、元気だろうか。)

手がかじかむような寒さの今年の2月、学校から自転車で帰る途中、一人のおばあちゃんと出会った。

「そこのお兄ちゃん。」

と、家の窓から声をかけられ、

「テレビが映らないから直してほしい。」

と言われて、なんとか直してみた。次に、

「大人の人を呼んでほしい。」

と言われた。理由を聞くと、普段昼間は一人で自宅で過ごしており、テレビを一日中つけているのだが、そのテレビが映らなくなってしまい、おばあちゃんはパニックになってしまったようだ。そして、そのおばあちゃんが肺気腫という病気を患っていることを知った。しかし、肺気腫と言われても、そのときの僕には、その病気がどんな病気か理解ができなかった。確かに、酸素ボンベを抱え、鼻に管をしていたのだけれど。そのうち、だんだんとおばあちゃんの息が上がり、体が小刻みに震えてきた。

そのときはまわりに人影はなく、僕はおばあちゃんに、

「救急車を呼びましょうか。」

と確認を取って、おばあちゃんの家で電話で119番にかけることにした。

初めてのことで、そのときの状況はあまり覚えていない。しかし、これだけは覚えている。(助けなければ……) と思ったことを。

救急車が来るまでの間、

「大丈夫ですよ、ここにいますよ。」

と言って、まだ小刻みに震えているおばあちゃんの手を握りしめた。玄関に行き、くつを履かせてあげ、会話が途切れないようにおばあちゃんと話をした。

だんだんと近づいてくる救急車。おばあちゃんが何度も何度も僕に、

「ありがとう、ありがとう。」

と言った。救急車が到着した。おばあちゃんはそのままだ病院に行った。

その日は、授業参観日だった。いつもより早い下校。家に帰ってから、担任の先生から電話があった。それは、あのおばあちゃんの家族からお礼が言いたいとのことで、「連絡先を教えてもいいか？」という内容だった。「いいです」と話をすると、しばらくして、おばあちゃんの家族から電話がかかってきた。

「君が救急車を呼んでくれたから、母は助かったよ。助けてくれて、ありがとう。」

とお礼を言われたが、正直とまどった。なぜなら、僕は偶然通りかかって、普通のことをしてただけなのに、「ありがとう」の言葉をもらったからだ。でも、うれしかった。そして、急に心の奥が温かくなった。